高崎市文化財調査報告書第365集

飯塚・貝沢堀添遺跡 3

―集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査―

2016

赤木　洋子

高崎市教育委員会

株式会社　測研

例　言

・本書は、集合住宅建設に伴い事前調査された飯塚・貝沢堀添遺跡の第３次発掘調査（高崎市遺跡調査番号648）の報告書である。
・本遺跡（３次調査地点）は、群馬県高崎市飯塚町字貝沢堀添294番地１に所在する。
・発掘調査及び整理等作業は、高崎市教育委員会の指導・監理の下に、事業者と委託契約を締結した株式会社測研たかさき事務所が実施した。
・発掘調査から整理等作業を経て本書刊行に至る経費は、事業主である赤木洋子氏に負担して頂いた。
・発掘調査の体制は下記のとおりである。
　高崎市教育委員会　　角田　真也　　矢島　浩
　株式会社測研たかさき事務所　　高林真人
・発掘調査期間は平成27年8月24日～平成27年9月27日、整理等作業期間は平成27年9月28日～平成28年3月15日である。
・本書の執筆は、第１章を高崎市教育委員会文化財保護課、第２～第４章を高林が行ない、編集は高林が行なった。
・出土した遺物及び各種原図・写真などの記録類は高崎市教育委員会が保管している。
・本遺跡の発掘調査および報告書刊行にあたって、下記の方々・機関から御指導・ご協力を賜った。ここに記して御礼申し上げます。（順不同・敬称略）
　赤木　洋子　　山下工業株式会社　　高崎市教育委員会

凡　例

・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用している。
・遺構挿図中に使用した座標値は世界測地系によるものであり、方位記号は座標北を示している。
・断面図・エレベーション図の各図に付した数値（Ｌ＝）は、海抜を表す。
・土層注記及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局　財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1998年版）』を使用した。
・遺構には次の略号を使用した。
　ＳＢ＝掘立柱建物跡　ＳＤ＝溝跡　ＳＫ＝土坑　ＳＥ＝井戸跡　Ｐ＝ピット（小穴）　ｐ＝建物跡ピット
・遺構の実測図は、遺構配置図を１/200、掘立柱建物跡の平・断面図を１/60、溝跡の平面図を１/100、断面図を１/50、土坑・井戸跡の平・断面図を１/40、ピットの平面図を１/150、断面図を１/30で掲載した。
・遺物の実測図は土器を１/４、石製品を１/３で掲載した。
・遺物写真は実測図とほぼ同寸となるように掲載した。
・出土した遺物の注記は、遺跡調査番号（648）・遺構名・出土層位などを記入した。
・本報告書では、下記の降下火山灰の略号を使用した。
　◎As－A：浅間Ａ軽石　◎As－B：浅間Ｂ軽石　◎As－C：浅間Ｃ軽石
・本報告書で使用した地図は下記のとおりである。
　◎国土地理院　地形図　「高崎」・「富岡」　１/25,000　◎高崎市都市計画基本図　１/2,500
・遺物実測図に使用したトーンは以下のとおりである。
　赤彩　煤・炭化物　灰釉陶器釉薬範囲　灰釉陶器断面　須恵器断面

目　次

例言
凡例
目次

第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　遺跡の位置と周辺の地形 …… 1
　第２節　周辺の遺跡 …… 1
第３章　調査方法と調査の経過 …… 3
　第１節　調査方法 …… 3
　第２節　調査の経過 …… 3
第４章　確認された遺構と遺物 …… 4
　第１節　遺構の分布と基本土層 …… 4
　第２節　掘立柱建物跡 …… 5
　第３節　溝跡 …… 9
　第４節　土坑 …… 11
　第５節　井戸跡 …… 12
　第６節　ピット …… 12
　第７節　遺物包含層 …… 14
　第８節　まとめ …… 16

挿図目次

第　１図　周辺遺跡図（１/25,000）・調査区位置図（１/2,500） …… 2
第　２図　調査区全体図・基本土層 …… 4
第　３図　１号・２号掘立柱建物跡平面・断面・エレベーション図 …… 6
第　４図　３号掘立柱建物跡平面・エレベーション図 …… 7
第　５図　４号掘立柱建物跡平面・エレベーション図 …… 8
第　６図　掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 8
第　７図　１号・２号溝跡平面・断面図 …… 10
第　８図　溝跡出土遺物実測図① …… 10
第　９図　溝跡出土遺物実測図② …… 11
第１０図　１号～４号土坑平面・断面図 …… 11
第１１図　土坑出土遺物実測図 …… 11
第１２図　１号井戸跡平面・断面図 …… 12
第１３図　ピット平面・エレベーション図 …… 12
第１４図　ピット出土遺物実測図 …… 13
第１５図　遺物包含層平面・断面図 …… 14
第１６図　遺物包含層出土遺物実測図① …… 14
第１７図　遺物包含層出土遺物実測図②・遺構外出土遺物実測図① …… 15
第１８図　遺構外出土遺物実測図② …… 16

表目次

第１表　１号掘立柱建物跡ピット観察表 …… 5
第２表　２号掘立柱建物跡ピット観察表 …… 6
第３表　３号掘立柱建物跡ピット観察表 …… 8
第４表　４号掘立柱建物跡ピット観察表 …… 9
第５表　土坑観察表 …… 11
第６表　井戸跡観察表 …… 12
第７表　ピット観察表 …… 13

遺物観察表 …… 17
写真図版

第１章　　調査に至る経緯

平成 27 年５月、土地所有者および施工責任者である赤木洋子氏と積水ハウス株式会社から、高崎市飯塚町において計画している集合住宅建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である飯塚・貝沢堀添遺跡と中世の上飯塚城に隣接し、16H07 遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年５月 12 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年６月 11 日に試掘（確認）調査を実施した。同年７月 21 日に文化財保護法に基づく届出が提出された。その結果、弥生時代中期後半の包含層と中世の上坑・溝状遺構を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「飯塚・貝沢堀添遺跡３」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に準じ、平成 27 年８月 21 日に赤木洋子氏と民間調査機関株式会社測研たかさき事務所との間で契約を締結、また同日に赤木洋子氏・株式会社測研たかさき事務所・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

第２章　　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と周辺の地形

飯塚・貝沢堀添遺跡は、高崎市飯塚町に所在する弥生時代及び中世の複合遺跡である。本遺跡の所在する高崎市は群馬県南西部に位置し、北東側に緩やかに弧を描く北西－南東方向に細長い形をしている。飯塚町は高崎市の南東側に位置しており、高崎市街地から北北西へ約３㎞の場所にある。東側は上越・北陸新幹線、西側は県道高崎渋川線が縦走する。北側は国道 17 号線が北東－南西方向に走り、本遺跡から南側へ約 900 ｍの所にＪＲ東日本信越本線の北高崎駅がある。

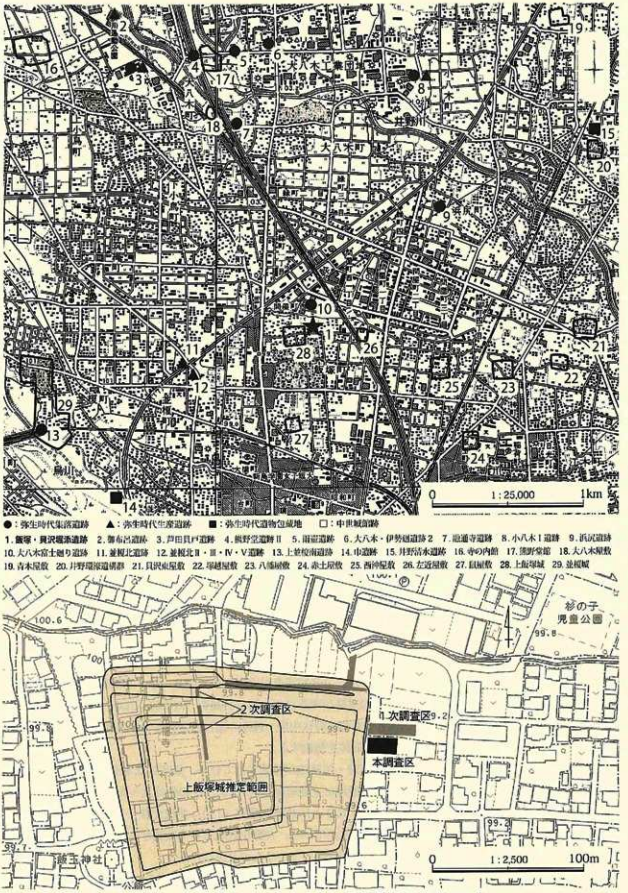
本遺跡は榛名山麓扇状地から南東方向に延びる高崎台地上に立地する。高崎台地は南西側を高崎市倉渕町鼻曲山を源とする烏川周辺に形成された烏川・碓氷川低地に、北東側を相馬ヶ原扇状地を源とする井野川周辺に形成された井野川低地に挟まれており、南東端部は烏川が東に向きを変え井野川が合流する高崎市倉賀野町から岩鼻町となる北西－南東方向に長い舌状台地である。本遺跡は高崎台地の中央部北西側の井野川低地際に位置しており、井野川低地との比高差は２～５ｍほどである。台地上面は非常に緩やかに南東方向に傾斜しており、浅い谷や微高地が見られる。本遺跡の周辺は住宅地となっているが、第３次調査区の現況は休耕畑である。標高は 100 ｍ前後で概ね平坦であるが、調査区の西側に上飯塚城跡の外堀と考えられる自然水路がある。

第２節　周辺の遺跡

飯塚・貝沢堀添遺跡では、これまで２度にわたって発掘調査が実施されている。第１次調査（2011）では弥生時代中期～後期の遺構・遺物包含層と中世の遺構が確認され、第２次調査（2016）では中世上飯塚城跡の内堀跡・外堀跡が確認されている。第３次調査でも弥生時代中期～後期の遺物包含層と中世の遺構が確認されていることから、本遺跡周辺の弥生時代及び中世の遺跡を概観する。

弥生時代　弥生時代の遺構は、集落跡・水田跡・包蔵地が確認されている。集落跡は本遺跡の北約 150 ｍに大八木富士廻り遺跡（10）があり、南西の烏川低地に上並榎南遺跡（13）、その他は北～北東側の井野川低地に分布する（３～９）。水田跡は本遺跡の西南西約 700 ｍに並榎北遺跡（11）、並榎北Ⅱ～Ⅴ遺跡（12）があり、その他は井野川低地に３遺跡（２・３・８）確認されている。井野川低地で多く確認されているが、高崎台地上にも集落・水田跡が確認されていることから集落が展開しているものと思われる。

中世　本遺跡の西隣りに上飯塚城跡（28）、西南西約 1.7㎞に並榎城跡（29）がある。井野川低地に５軒（16～20）、高崎台地上に８軒（21～27）の屋敷跡がある。本遺跡の西側から南側にかけて屋敷跡が集中している。



第１図　周辺遺跡図（1/25,000）・調査区位置図（1/2,500）

第３章　調査方法と調査の経過

第１節　調査方法

飯塚・貝沢堀添遺跡の第３次発掘調査は、集合住宅建設に伴い現状が変更される建物部分において工事を行う前に実施した記録保存調査である。したがって、発掘調査範囲は南北約 11 m、東西約 19 mの長方形を呈する。発掘調査面積は約 210㎡である。

遺構の確認は、試掘調査の成果を基に現耕作土の除去までを重機を使用して掘削し、黒褐色土（Ⅱ層、第４章基本土層参照）上面を人力で削り遺構確認作業を行った。その際出土した遺物は確認面で取り上げた。表土掘削時から多量の水が湧き出し確認面が泥濘るんだ状態になることから、人力で試掘調査トレンチ跡、重機で調査区内の一部をトレンチ状に掘り、そこに水が溜まるようにして日中は常時水中ポンプによる排水を行った。１号溝跡の調査以降は、調査区北壁際に水路状にサブトレンチを掘り、調査区西端部に釜場を設け１号溝跡から排水を行った。

遺構の掘り込みは、溝跡は残存長のほぼ半分の位置に土層観察ベルトを設定し、土の堆積状況や遺物の出土状況に留意して行った。掘立柱建物跡・土坑・井戸跡・ピットは平面形や大きさに応じて適宜半截位置を設定し掘り込みを行った。遺物包含層は遺構精査終了後に鋤簾で掘削を行い、遺物が多数出土した個所は移植ごてを使用した。

遺物の取り上げは、今回確認された遺構では図化及び座標値測量を必要とする遺物が出土しなかったため、すべて遺構覆土で取り上げた。遺物包含層から出土した遺物は、必要と判断した遺物は図化及び座標値を測量して取り上げを行い、大半は包含層出土遺物で一括して取り上げた。

遺構の記録は、遺構実測図作成及び写真撮影を実施している。遺構実測図は、光波測距儀を用いて全体図を1/100、遺構平面図・断面図を１/20の縮尺で図化した。ピットは土層断面図を作成せず、土層注記・断面写真撮影後完掘したが、必要に応じてエレベーション図を作成した。写真撮影は35㎜小型一眼レフカメラと約1800万画素のデジタル一眼ノンレフレックスカメラを併用して行った。35㎜カメラはモノクローム・カラーリバーサルフィルムを使用し、ともに同一カットを３枚１単位で露出を変えて撮影を行った。デジタルカメラも同一カットの露出を変えて３枚１単位で撮影を行った。ピットの土層断面・全景写真はデジタルカメラのみ撮影を行った。

第２節　調査の経過

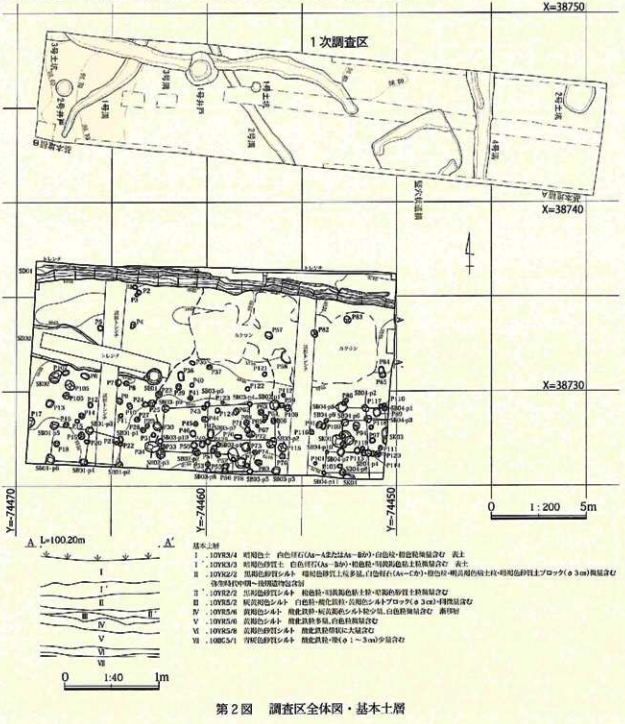
調査日誌抄

平成 27 年８月 24 日	調査区設定、発掘調査道具運搬、仮設トイレ搬入	平成 27 年９月 15 日	調査区全景写真撮影
平成 27 年８月 25 日	表土掘削開始	平成 27 年９月 16 日	遺物包含層調査開始
平成 27 年８月 26 日	作業員雇用開始、表土掘削終了	平成 27 年９月 18 日	遺物包含層調査終了
平成 27 年８月 27 日	溝跡調査開始	平成 27 年９月 24 日	発掘調査道具の片づけ
平成 27 年９月　２日	掘立柱建物跡・土坑・井戸跡・ピット調査開始	平成 27 年９月 25 日	仮設トイレ搬出
		平成 27 年９月 27 日	埋め戻し実施、現場作業すべて終了

第４章　　確認された遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構分布　飯塚・貝沢堀添遺跡の第３次発掘調査区では、中世の掘立柱建物跡４棟、溝跡２条、土坑４基、井戸跡４基、ピット101基（欠番３基、掘立柱建物跡に振替21基）と、弥生時代中期～後期の遺物包含層２か所が確認された。溝跡はＳＤ０１が調査区北壁際から溝幅の南半分が確認され、ＳＤ０２が調査区北側西部から西端部が確認された。約６ｍ北側に位置する１次調査区と遺構分布状況が異なることから、ＳＤ０１が区画溝であった可能性が高い。掘立柱建物跡は調査区南側の西部に１棟、中央に２棟、東部に１棟分布していることから、少なくとも２時期以上の時期差があると考えられる。いずれも南側調査区外に、ＳＢ０４は東側調査区外にも延



第２図　調査区全体図・基本土層

び、西側には上飯塚城跡の外堀跡があることから建物の分布する範囲は南東側へ拡がるものと思われる。土坑は調査区南側西部に１基、東部に３基、井戸跡は調査区南側西部に１基確認されたが、分布状況に特徴は見られない。ピットは大半が調査区南側に分布し、調査区北側ではまばらに分布するのみである。弥生時代中期～後期の遺物包含層は調査区の西側と東側の２か所で確認された。南側に行くに従って遺物出土量が少なくなることから、南側へは大きく拡がらないものと考えられる。

基本土層　Ⅰ層・Ⅰ´層は表土である。Ⅰ´層の土色が若干明るく、明黄褐色粘土粒を含んでいることから細分した。Ⅱ層・Ⅱ´層は黒褐色砂質シルトである。Ⅱ層は暗褐色砂質土が多く、弥生土器を含む遺物包含層である。１次調査のⅣ層に対応する。第３次調査区では１次調査のⅡ層・Ⅲ層にする土層は確認されなかった。Ⅱ´層は酸化鉄を多量に含み橙色味が強く、弥生土器を包含しない。１次調査のⅤ層に対応する。Ⅲ層は灰黄褐色シルトである。下層の黄褐色シルト塊・粒をわずかに含み、１次調査では対応する土層は確認されていない。Ⅳ層は黄褐色シルトである。Ⅲ層堆積土粒を少量含んでおり、Ⅴ層からⅡ´層・Ⅲ層にかけての漸移層である。Ⅴ層は黄褐色シルトである。１次調査のⅦ層に対応する。Ⅵ層は黄褐色砂質シルトである。Ⅴ層と同様な堆積土であるが、やや砂っぽいこと、酸化鉄が帯状に多量含まれていることからⅤ層と区別した。１次調査では対応する層は確認されていない。Ⅶ層は青灰色砂質シルトで、礫（φ１～３cm）を少量含んでいる。１次調査のⅧ層に対応する。Ⅳ～Ⅶ層が高崎泥流の堆積土、Ⅱ～Ⅲ層が泥流上の堆積土と判断した。

第２節　掘立柱建物跡

第３次発掘調査では、４棟の掘立柱建物跡が確認された。ＳＢ０１・０２は発掘調査時点で建物跡と捉えることが出来たが、ＳＢ０３・０４はピットとして調査を行い整理等作業の段階で建物跡と捉えたものである。

１号掘立柱建物跡　（第３図、写真図版１）

位置　調査区南側西部。　**重複関係**　なし。　**遺存状態**　南側が調査区外にあるが、概ね良好。　**規模**　東西間口は約3.5 m（２間）、南北間口は2.0 m以上（１間以上）。東西柱間は北側が西から1.9 m、1.7 m、南側が西から1.8 m、1.8 m、南北柱間は東側から1.4 m、1.7 m、1.8 mを測る。　**主軸方位**　東西Ｎ―86°―Ｗ、南北Ｎ―４°―Ｅ。　**概要**　ｐ１～ｐ６を柱穴とする総柱の掘立柱建物跡であるが、南側が調査区外にあるため全容は不明である。ｐ２・ｐ４は礎石がある。　**その他の施設**　なし。　**遺物検出状況**　ｐ２から２点、ｐ６から１点の弥生土器片が出土した。　**遺物**　弥生土器片が出土したが、図示し得るものはなかった。　**備考**　本遺構は、２間×１間以上の総柱の掘立柱建物跡と判断した。ＳＢ０２～ＳＢ０４と主軸方位がほぼ同じであることから同一規格で造られたと考えられるが、ＳＢ０２とＳＢ０３が重複していることから２時期以上あるものと想定される。また、ＳＤ０１とは東西主軸方位が同じであることから同時期に存続していたと考えられる。Ｐ17が直線上にのることから西側に下屋が付く可能性がある。時期を特定し得る遺物はないが、周辺遺跡の調査成果から帰属時期は中世と考えられる。

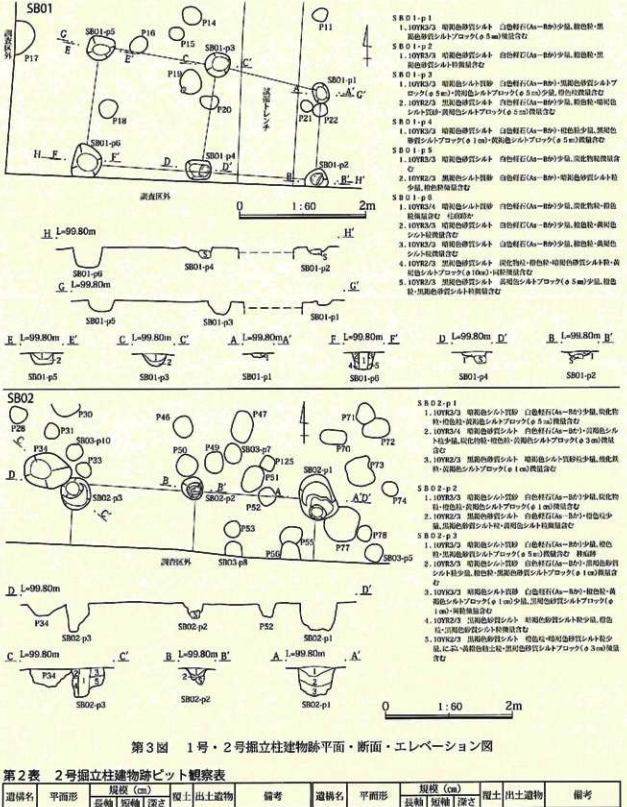
第１表　１号掘立柱建物跡ピット観察表

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考	遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ			
ｐ１	楕円形	33	24	6	B			ｐ４	隅丸長方形	41	30	6	B		礎石あり
ｐ２	隅丸方形	[38]	[33]	5	B	弥生土器	礎石あり	ｐ５	隅丸方形	46	40	18	B		
ｐ３	円形	39	39	23	A			ｐ６	不整楕円形	[56]	48	31	A	弥生土器	

A：暗褐色シルト質砂　B：暗褐色砂質シルト　C：黒褐色シルト質砂　（　）：推定　［　］：遺存

２号掘立柱建物跡　（第３図、写真図版１）

位置　調査区南側中央。　**重複関係**　ＳＢ０３と重複するが、新旧関係は不明。　**遺存状態**　南側が調査区外にあるが、概ね良好。　**規模**　東西間口は約3.9 m（２間）、南北間口は0.9 m以上（１間以上）。東西柱間は西から1.9 m、2.0 mを測る。　**主軸方位**　東西Ｎ―90°、南北Ｎ―０°。　**概要**　ｐ１～ｐ３を柱穴とする総柱の



第３図　１号・２号掘立柱建物跡平面・断面・エレベーション図

第２表　２号掘立柱建物跡ピット観察表

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考	遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ			
ｐ１	楕円形	82	55	58	A		P77より新	ｐ３	隅丸方形	51	46	46	A	弥生土器	P34より古
ｐ２	不整円形	37	33	14	A	弥生土器	礎石あり								

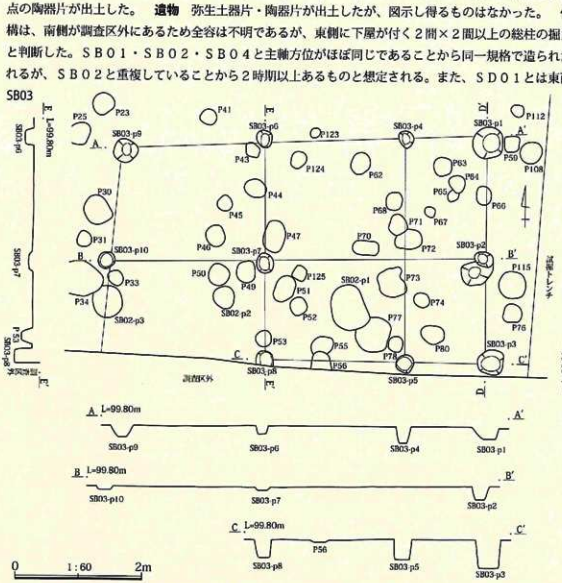
A：暗褐色シルト質砂　B：暗褐色砂質シルト　C：黒褐色シルト質砂　（　）：推定　［　］：遺存

掘立柱建物跡と思われるが、南側が調査区外にあるため全体像は不明である。ｐ２は礎石がある。　**その他の施設**　なし。　**遺物検出状況**　ｐ２から４点、ｐ３から４点の弥生土器片が出土した。　**遺物**　弥生土器片が出土

したが、図示し得るものはなかった。　**備考**　本遺構は、南側の大半が調査区外にあるため全容は不明であるが、２間×１間以上の総柱の掘立柱建物跡と判断した。ＳＢ０１・ＳＢ０３・ＳＢ０４と主軸方位がほぼ同じであることから同一規格で造られたと考えられるが、ＳＢ０３と重複していることから２時期以上あるものと想定される。また、ＳＤ０１とは東西主軸方位がほぼ同じであることから同時期に存続していたと考えられる。時期を特定し得る遺物はないが、周辺遺跡の調査成果から帰属時期は中世と考えられる。

３号掘立柱建物跡　（第４図）

位置　調査区南側中央。　**重複関係**　ＳＢ０２と重複するが、新旧関係は不明。　**遺存状態**　南側が調査区外にあるが、概ね良好。　**規模**　東西間口は約4.6ｍ（２間）、南北間口は3.7ｍ以上（２間以上）で、東側に下屋が付く。東西柱間は北側かつ西から2.2ｍ･2.2ｍ･1.3ｍ、2.5ｍ･(2.2ｍ)･(1.2ｍ)、(2.5ｍ)･2.2ｍ･1.3ｍ、南北柱間は西側かつ北から1.8ｍ・1.5ｍ以上、2.0ｍ・1.5ｍ、(1.9ｍ)・(1.7ｍ)、1.9ｍ・1.7ｍを測る。
主軸方位　東西Ｎ－89°－Ｅ、南北Ｎ－１°－Ｗ。　**概要**　ｐ４～ｐ10を柱穴とする総柱の掘立柱建物跡で、東側に下屋が付く（ｐ１～ｐ３）と考えられるが、南側が調査区外にあるため全容は不明である。　**その他の施設**　なし。　**遺物検出状況**　ｐ８から４点、ｐ１・ｐ３・ｐ６・ｐ10から１点ずつの弥生土器片が、ｐ５から１点の陶器片が出土した。　**遺物**　弥生土器片・陶器片が出土したが、図示し得るものはなかった。　**備考**　本遺構は、南側が調査区外にあるため全容は不明であるが、東側に下屋がけく２間×２間以上の総柱の掘立柱建物跡と判断した。ＳＢ０１・ＳＢ０２・ＳＢ０４と主軸方位がほぼ同じであることから同一規格で造られたと考えられるが、ＳＢ０２と重複していることから２時期以上あるものと想定される。また、ＳＤ０１とは東西主軸方位



第４図　３号掘立柱建物跡平面・エレベーション図

第3表　3号掘立柱建物跡ピット観察表

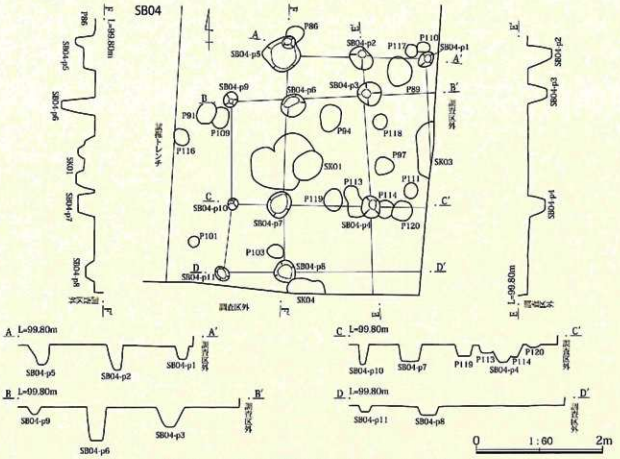
遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考	遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ			
p 1	隅丸方形	50	47	21	A	弥生土器	旧 P60	p 6	隅丸方形	29	25	13	A	弥生土器	旧 P42
p 2	不整楕円形	61	42	21	A		旧 P75	p 7	不整円形	32	27	6	A		旧 P48
p 3	隅丸方形	42	39	45	A	弥生土器	旧 P81	p 8	楕円形	[23]	27	28	A	弥生土器	旧 P54
p 4	不整楕円形	27	23	27	A		旧 P61	p 9	隅丸方形	39	37	17	A		旧 P26
p 5	隅丸方形	29	29	32	A	陶器	旧 P79	p 10	円形	27	26	5	A	弥生土器	旧 P32

A：暗褐色シルト質砂　B：暗褐色砂質シルト　C：黒褐色シルト質砂　（　）：推定　［　］：遺存

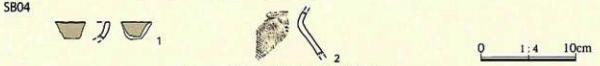
がほぼ同じであることから同時期に存続していたと考えられる。時期を特定し得る遺物はないが、周辺遺跡の調査成果から帰属時期は中世と考えられる。

4号掘立柱建物跡（第5・6図、写真図版3）

位置　調査区南側東部。　**重複関係**　ＳＫ０１・ＳＫ０２・ＳＫ０４と重複するが、新旧関係は不明。　**遺存状態**　東側・南側が調査区外にあるが、概ね良好。　**規模**　東西間口は 2.5 m以上（2間以上）、南北間口は 3.2 m以上（2間以上）で、北側と西側に下屋が付く。東西柱間は北側かつ西から 1.2 m・1.0 m、1.0 m・1.2 m・(1.0 m)、0.8 m・1.4 m・0.9 m以上、1.0 m・(1.3 m)・(0.8 m以上)、南北柱間は西側かつ北から 1.6 m・1.1 m、0.7 m・1.6 m・1.1 m、0.6 m・1.8 m・(1.1 m)、(0.6 m)・(1.1 m以上)・不明を測る。　**主軸方位**　東西N—89°—W、



第5図　4号掘立柱建物跡平面・エレベーション図



第6図　掘立柱建物跡出土遺物実測図

南北N－1°－E。 **概要** p３・p４・p６～p８を柱穴とする総柱の掘立柱建物跡で、北側と西側に下屋が付く（p１・p２・p５・p９～p11）と考えられるが、東側・南側が調査区外にあるため全容は不明である。

その他の施設 なし。 **遺物検出状況** p１・p３・p４・p７・p８・p10・p11から27点の弥生土器片と滑石１点が出土した。 **遺物** 本遺構に伴うものではないが、弥生土器２点を図示した。 **備考** 本遺構は、東側・南側が調査区外にあるため全容は不明であるが、北側と西側に下屋が付く２間以上×２間以上の総柱の掘立柱建物跡と判断した。ＳＢ０１～ＳＢ０３と主軸方位がほぼ同じであることから同一規格で造られたと考えられるが、ＳＢ０２とＳＢ０３が重複していることから２時期以上あるものと想定される。また、ＳＤ０１とは東西主軸方位がほぼ同じであることから同時期に存続していたと考えられる。時期を特定し得る遺物はないが、周辺遺跡の調査成果から帰属時期は中世と考えられる。

第４表　４号掘立柱建物跡ピット観察表

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
p１	楕円形	29	21	20	A	弥生土器	旧P90
p２	楕円形	40	30	40	A		旧P88
p３	円形	38	36	30	A	弥生土器	旧P95
p４	楕円形	35	29	27	A	弥生土器	旧P98　P113・114より新
p５	隅丸方形	57	52	20	A		旧P87
p６	円形	38	35	52	C		旧P93
p７	楕円形	42	35	26	A	弥生土器	旧P99
p８	不整円形	34	34	12	A	弥生土器	旧P104　SK04より古
p９	円形	25	22	15	A		旧P92
p10	円形	18	17	31	A	弥生土器	旧P100
p11	楕円形	25	20	9	A	弥生土器	旧P102

A：暗褐色シルト質砂　B：暗褐色砂質シルト　C：黒褐色シルト質砂　（　）：推定　［　］：遺存

第３節　溝跡

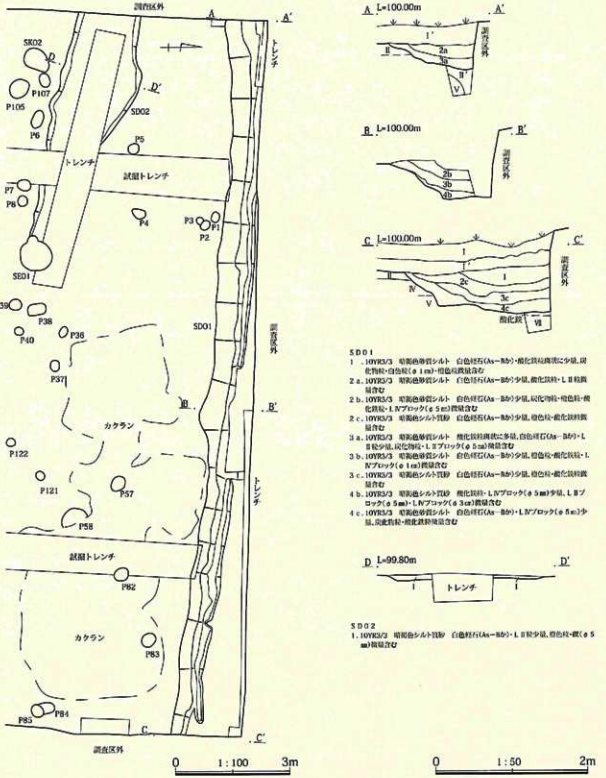
１号溝跡（第７～９図、写真図版２・３）

位置 調査区北壁際。 **重複関係** なし。 **遺存状態** 溝幅の北半分が調査区外にあるが、概ね良好。 **覆土** 暗褐色砂質シルトが基調で、一部シルト質砂が見られる。底面には酸化鉄が帯状に沈殿した状況が確認された。 **規模** 長さは直線で19ｍ確認され、幅は1.7ｍ以上、確認面からの深さは調査区西壁では80cm、東壁では110cmを測る。 **主軸方位** N－86°－W。 **遺物** 弥生土器片が154点、須恵器４点、灰釉陶器１点が出土した。本遺構に伴うものではないが、弥生土器10点、須恵器２点、灰釉陶器１点、滑石１点を図示した。 **備考**

本遺構は、上端幅２～３ｍと推測される東西方向に走る溝跡である。西側は上飯塚城跡の外堀から派生すると思われ、東側の端部はどこに至るのかは不明である。底面は西から東へ低くなり、造成時の排水のためか壁際は溝状に深くなっている。底面付近に水性堆積物が堆積していないことから、水がしみ出すものの常に溜まっている状況ではなかったと考えられる。本遺構を境に南と北で遺構の分布状況が異なること、発掘調査時に常に水がしみ出てきた場所であったことから、区画と水捌けを良くする機能を兼ねた溝跡と考えられる。時期を特定し得る遺物はないが、周辺遺跡の調査成果から帰属時期は中世と考えられる。

２号溝跡（第７・９図、写真図版２・３）

位置 調査区北側西部。 **重複関係** ＳＥ０１と重複し、本遺構のほうが古い。 **遺存状態** 西側が調査区外にあるが、概ね良好。 **覆土** 暗褐色シルト質砂が堆積する。 **規模** 長さは直線で6.2ｍ確認され、幅は推定0.7～2.0ｍ、確認面からの深さは８cmを測る。 **主軸方位** N－74°－W。 **遺物** 弥生土器片が105点出土した。本遺構に伴うものではないが、弥生土器片４点を図示した。 **備考** 本遺構は、西北西―東南東方向に走る溝跡であるが、西端部は不明である。非常に浅く、掘り込みも不明瞭であることから、自然流路ないし自然地形の可能性が高い。中世の遺構と同じ覆土であることから、帰属時期はＳＥ０１より古い時期の中世と考えられる。



SD01

1 .10YR3/3 暗褐色砂質シルト 白色粒子(As−B ホ)・鉄化鉄結核微量に少量、炭化物粒・白色粒(φ 1 mm)・橙色鉄質粒含む

2 a. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 白色粒子(As−B ホ)少量、鉄化鉄粒・L II 粒微量含む

2 b. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 白色粒子(As−B ホ)少量、炭化物粒・橙色粒・微化鉄粒・L IVブロック(φ 5 cm)微量含む

2 c. 10YR3/3 暗褐色シルト質砂 白色粒子(As−B ホ)少量、橙色粒・鉄化鉄粒微量含む

3 a. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 鉄化鉄粒微量に多量、白色粒子(As−B ホ)・L II 粒少量、炭化物粒・L IIブロック(φ 5 cm)微量含む

3 b. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 白色粒子(As−B ホ)少量、橙色粒・鉄化鉄粒・L IVブロック(φ 1 cm)微量含む

3 c. 10YR3/3 暗褐色シルト質砂 白色粒子(As−B ホ)少量、橙色粒・鉄化鉄粒微量含む

4 b. 10YR3/3 暗褐色シルト質砂 鉄化鉄粒・L IVブロック(φ 5 cm)少量、L IIブロック(φ 5 cm)・L IVブロック(φ 3 cm)微量含む

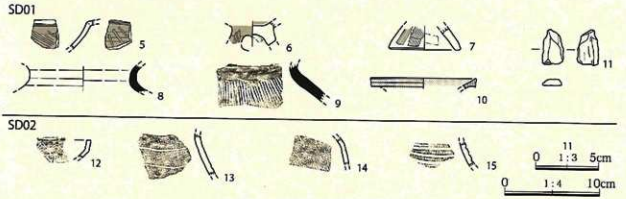
4 c. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 白色粒子(As−B ホ)・L IVブロック(φ 5 cm)少量、炭化物粒・鉄化鉄粒微量含む

SD02

1. 10YR3/2 暗褐色シルト質砂 白色粒子(As−B ホ)・L II 粒少量、橙色粒・鉄(φ 5 mm)微量含む

第７図　１号・２号溝跡平面・断面図

第８図　溝跡出土遺物実測図①



第９図　溝跡出土遺物実測図②

第４節　土坑

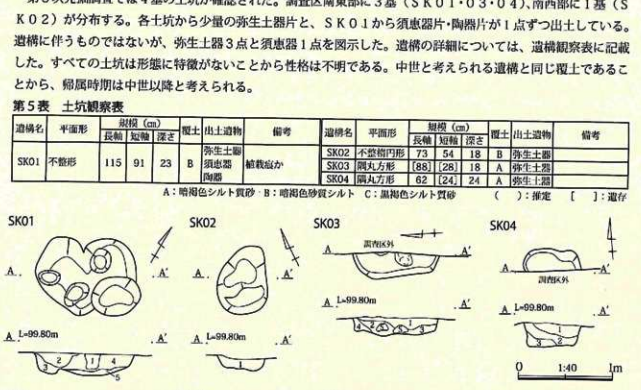
第３次発掘調査では４基の土坑が確認された。調査区南東部に３基（ＳＫ０１・０３・０４）、南西部に１基（ＳＫ０２）が分布する。各土坑から少量の弥生土器片と、ＳＫ０１から須恵器片・陶器片が１点ずつ出土している。遺構に伴うものではないが、弥生土器３点と須恵器１点を図示した。遺構の詳細については、遺構観察表に記載した。すべての土坑は形態に特徴がないことから性格は不明である。中世と考えられる遺構と同じ覆土であることから、帰属時期は中世以降と考えられる。

第５表　土坑観察表

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
SK01	不整形	115	91	23	B	弥生土器 須恵器 陶器	植栽痕か

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
SK02	不整楕円形	73	54	18	B	弥生土器	
SK03	隅丸方形	[88]	[28]	18	A	弥生土器	
SK04	隅丸方形	62	[24]	24	A	弥生土器	

A：暗褐色シルト質砂　B：暗褐色砂質シルト　C：黒褐色シルト質砂　（　）：推定　［　］：遺存



ＳＫ０１
1．10YR3/3　暗褐色砂質シルト　白色軽石(As－B)小少量、Ⅰ,Ⅱブロック(φ５mm)・Ⅰ,Ⅳ粒微量含む
2．10YR3/3　暗褐色砂質シルト　白色浮石(As－B かか)・Ⅰ,Ⅳブロック(φ３mm)微量含む
3．10YR3/3　暗褐色砂質シルト　Ⅰ,Ⅱブロック(φ３cm)少量、白色軽石(As－B かか)・Ⅰ,Ⅳ粒微量含む
4．10YR2/3　黒褐色粘質シルト　Ⅰ,Ⅳ粒少量、橙色鉄粒・暗褐色砂質シルト粒微量含む
5．10YR2/2　黒褐色砂質シルト　暗褐色砂質シルト粒微量含む

ＳＫ０２
1．10YR3/3　暗褐色砂質シルト　白色軽石(As－B)小少量、炭化材粒・Ⅰ,Ⅱ粒・Ⅰ,Ⅳ粒微量含む

ＳＫ０３
1．10YR3/3　暗褐色シルト質砂　白色浮石(As－B かか)・Ⅰ,Ⅱ粒少量、橙色粒・Ⅰ,Ⅱブロック(φ５mm)微量含む
2．10YR3/3　暗褐色シルト質砂　白色軽石(As－B)小少量、橙色粒・炭(φ１mm)・焼土粒・Ⅰ,Ⅱ粒微量含む
3．10YR3/3　暗褐色シルト質砂　白色浮石(As－B かか)・Ⅰ,Ⅱ粒少量、橙色粒・Ⅰ,Ⅱブロック(φ１cm)微量含む
4．10YR3/2　黒褐色砂質シルト　暗褐色シルト質砂粒少量含む　粗かすさか

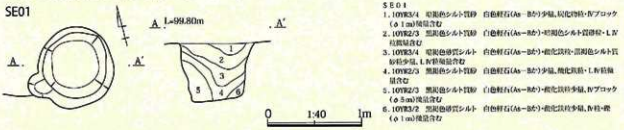
ＳＫ０４
1．10YR3/3　暗褐色シルト質砂　白色軽石(As－B かか)・橙色砂粒少量、Ⅰ,Ⅱブロック(φ１cm)・Ⅰ,Ⅳブロック(φ５cm)微量
2．10YR3/3　暗褐色シルト質砂　白色軽石(As－B かか)・Ⅰ,Ⅱブロック(φ５mm)少量、炭化材粒・にぶい黄褐色粘土ブロック(φ５cm)・橙色砂粒微量含む
3．10YR3/3　暗褐色シルト質砂　白色軽石(As－B かか)・にぶい黄橙色粘土ブロック(φ１cm)・Ⅰ,Ⅱ粒微量含む。

第１０図　１号～４号土坑平面・断面図

第１１図　土坑出土遺物実測図

第５節　井戸跡

第３次発掘調査では調査区南側中央で１基の井戸跡が確認された。２号溝跡と重複し、本遺構のほうが新しい。形態の特徴から井戸跡と判断した。遺構の詳細は観察表に記載した。中世と考えられる遺構と同じ覆土であることから、帰属時期は中世以降と考えられる。



第 12 図　１号井戸跡平面・断面図

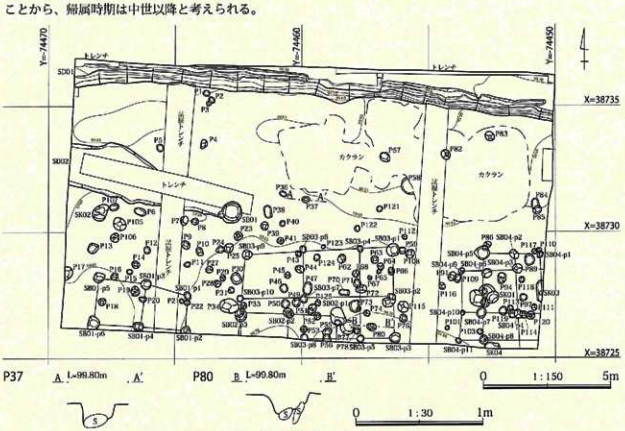
第６表　井戸跡観察表

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考	遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ			
SE01	不整円形	88	81	61	A		西側に張出部あり								

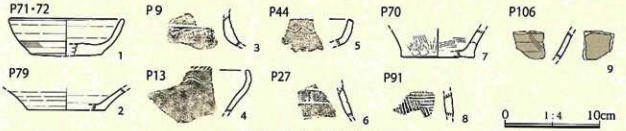
A：暗褐色シルト質砂　B：暗褐色砂質シルト　C：黒褐色シルト質砂　　（　）：推定　［　］：遺存

第６節　ピット

第３次発掘調査ではピットを 125 基確認したが、遺構でないと判断し欠番としたものが３基、整理等作業で掘立柱建物跡と判断したものが 21 基ある。そのため確認されたピットは 101 基となった。位置関係が把握できるように１つの平面図とし、礎石が確認されたピットはエレベーション図を掲載した。各遺構の詳細については遺構観察表に記載した。Ｐ７１・７２からかわらけ、Ｐ７９から土師質土器が出土し図示した。また多数のピットから弥生土器片が出土し、遺構に伴うものではないが７点図示した。中世と考えられる遺構と同じ覆土であることから、帰属時期は中世以降と考えられる。



第 13 図　ピット平面・エレベーション図



第14図　ピット出土遺物実測図

第7表　ピット観察表

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
Pit 1	楕円形	27	22	11	A		
Pit 2	楕円形	27	22	12	A		P3より新
Pit 3	円形	[18]	18	12	A		P2より古
Pit 4	不整楕円形	38	27	16	A		
Pit 5	円形	31	28	10	A		
Pit 6	楕円形	49	28	14	A	弥生土器	
Pit 7	楕円形	36	29	19	A	弥生土器	
Pit 8	円形	28	25	9	A	弥生土器	
Pit 9	円形	35	31	10	A	弥生土器	
Pit10	楕円形	34	25	16	A	弥生土器	
Pit11	隅丸方形	25	21	11	A	弥生土器	
Pit12	円形	29	25	10	A	弥生土器	
Pit13	隅丸方形	43	38	3	A	弥生土器	
Pit14	円形	32	28	24	A	弥生土器	
Pit15	円形	23	21	11	A	弥生土器	
Pit16	楕円形	31	24	15	A		
Pit17	楕円形	[51]	[44]	23	A	弥生土器	
Pit18	円形	30	28	12	A	弥生土器	
Pit19	不整円形	39	34	12	A	弥生土器	
Pit20	不整楕円形	30	22	11	A		
Pit21	円形	20	18	3	A		
Pit22	円形	24	21	2	A		
Pit23	円形	35	33	33	A		
Pit24	隅丸方形	30	28	15	A	弥生土器	P25より新
Pit25	隅丸方形	40	35	23	A		P24より古
Pit26							SB03-p9に変更
Pit27	円形	28	26	20	A		
Pit28	隅丸方形	28	26	23	A		
Pit29	円形	24	21	14	A		
Pit30	隅丸方形	47	40	16	A		
Pit31	隅丸方形	25	23	24	A		
Pit32							SB03-p10に変更
Pit33	不整円形	26	22	31	A	弥生土器	
Pit34	楕円形	75	55	26	A	弥生土器	SB02-p3より新
Pit35							欠番
Pit36	楕円形	30	20	8	A		
Pit37	楕円形	30	24	9	C		礎石あり
Pit38	隅丸長方形	48	30	13	C		
Pit39	円形	32	30	27	C	弥生土器	
Pit40	円形	23	21	4	A		
Pit41	隅丸方形	26	25	33	A		
Pit42							SB03-p6に変更
Pit43	隅丸方形	25	22	19	A		
Pit44	楕円形	36	29	29	A	弥生土器	
Pit45	不整円形	24	23	14	A	弥生土器	
Pit46	円形	34	29	10	A	弥生土器	
Pit47	楕円形	49	33	15	A	弥生土器	
Pit48							SB03-p7に変更
Pit49	不整円形	34	29	14	A	弥生土器	
Pit50	円形	33	32	9	A	弥生土器	
Pit51	楕円形	44	32	51	A	弥生土器	
Pit52	隅丸方形	27	26	24	A		
Pit53	円形	25	25	17	A	弥生土器	
Pit54							SB03-p8に変更

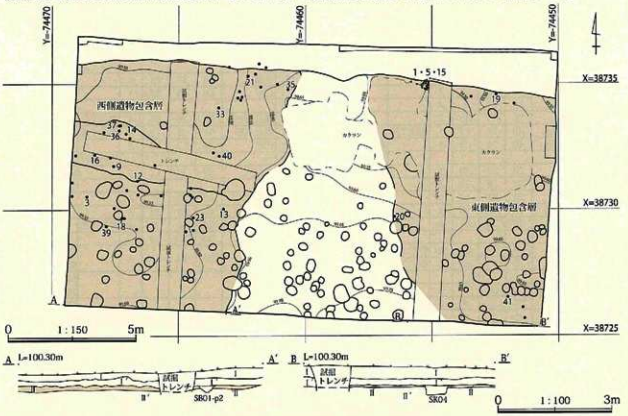
遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
Pit55	楕円形	39	30	2	A		P56より古
Pit56	楕円形	[28]	33	3	A	弥生土器	P55より新
Pit57	楕円形	44	35	21	A		
Pit58	円形	71	[40]	10	C		炭化物少量含む
Pit59	隅丸方形	30	24	15	A		
Pit60							SB03-p1に変更
Pit61							SB03-p4に変更
Pit62	楕円形	36	30	24	A	弥生土器	
Pit63	隅丸方形	30	29	17	A		
Pit64	不整円形	28	24	35	A		P65より新
Pit65	楕円形	[19]	16	5	A		P64より古
Pit66	楕円形	30	24	33	A	弥生土器	下部は隅丸方形
Pit67	隅丸方形	17	16	20	A		
Pit68	隅丸方形	29	25	33	A		
Pit69							欠番
Pit70	隅丸長方形	42	23	13	A	弥生土器	
Pit71	不整円形	31	29	22	A	かわらけ	P72より新
Pit72	楕円形	43	32	38	A	かわらけ 弥生土器	P71より古
Pit73	不整形	46	44	26	A		
Pit74	円形	26	23	30	A		
Pit75							SB03-p2に変更
Pit76	隅丸方形	29	29	26	A	弥生土器	
Pit77	隅丸方形	57	55	21	A	弥生土器	
Pit78	円形	25	23	15	A		
Pit79						かわらけ	SB03-p5に変更
Pit80	楕円形	38	30	11	A		礎石あり
Pit81							SB03-p3に変更
Pit82	楕円形	40	33	37	A		
Pit83	不整円形	40	34	34	A		
Pit84	楕円形	[44]	30	5	A	弥生土器	
Pit85	楕円形	36	30	30	C		
Pit86	円形	[29]	26	23	A		SB04-p5より古 柱痕（φ5cm）含
Pit87							SB04-p5に変更 P86より新
Pit88							SB04-p2に変更
Pit89	楕円形	48	38	42	A	弥生土器	
Pit90							SB04-p1に変更
Pit91	楕円形	37	28	32	A	弥生土器	P109より新
Pit92							SB04-p9に変更
Pit93							SB04-p6に変更
Pit94	楕円形	43	33	26	A		
Pit95							SB04-p3に変更
Pit96							欠番
Pit97	隅丸方形	30	27	2	A		
Pit98							SB04-p4に変更 P113より新
Pit99							SB04-p7に変更
Pit100							SB04-p10に変更
Pit101	円形	18	17	13	A		
Pit102							SB04-p11に変更
Pit103	楕円形	27	21	23	A		
Pit104							SB04-p8に変更

遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考	遺構名	平面形	規模（cm）			覆土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ			
Pit105	楕円形	56	46	24	A			Pit115	円形	43	43	27	A	弥生土器	
Pit106	不整円形	35	34	32	A	弥生土器		Pit116	隅丸方形	27	24	40	A		
Pit107	楕円形	37	27	15	A	弥生土器		Pit117	隅丸方形	20	19	40	A		
Pit108	円形	37	34	20	A			Pit118	円形	25	22	9	A	弥生土器	
Pit109	楕円形	34	[24]	23	A		P91より古	Pit119	楕円形	35	29	13	A		
Pit110	隅丸方形	21	16	20	A			Pit120	隅丸方形	31	30	35	A		P114より新
Pit111	円形	25	22	49	A	弥生土器		Pit121	円形	25	22	21	A		
Pit112	隅丸方形	21	19	17	A			Pit122	円形	23	22	13	A		
Pit113	不整楕円形	52	[30]	19	A		SB04-p4より古	Pit123	円形	17	15	7	A		
Pit114	円形	29	[27]	19	A		SB04-p4・P120より古	Pit124	不整円形	28	24	7	C		
								Pit125	隅丸方形	22	22	24	A	弥生土器	

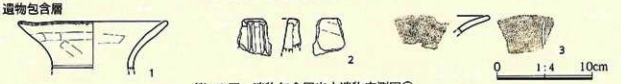
A：暗褐色シルト質砂　B：暗褐色砂質シルト　C：黒褐色シルト質砂　（　）：推定　［　］：遺存

第７節　遺物包含層

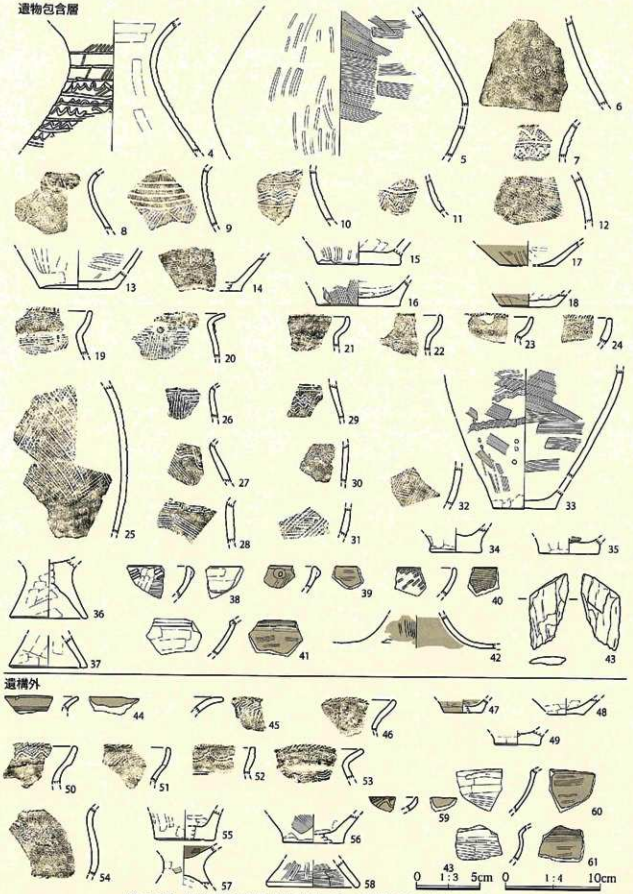
第３次発掘調査では、調査区西側と東側の２か所で弥生時代中期～後期の遺物包含層が確認された。西側包含層は層厚 20cmほどで、調査区中央から西側へ向かって緩く傾斜する窪地に流れ込んだものと考えられる。南側に行くほど遺物量が少なることから、南側へは広がらないものと思われる。東側包含層は層厚 10cmほどで、調査区中央から東側に向かって緩く傾斜する窪地に流れ込んだものと考えられる。西側と同様に南側の遺物が少なくなることから、南側へは広がらないものと思われる。西側遺物包含層からは弥生土器 698 点、東側遺物包含層からは弥生土器 140 点と滑石１点が出土し、弥生土器 42 点、滑石１点を図示した。破片が多いものの、比較的大きく復元できた遺物も出土していることから、本遺跡周辺に該期の集落が存在する可能性がある。



第 15 図　遺物包含層平面・断面図



第 16 図　遺物包含層出土遺物実測図①



第 17 図　遺物包含層出土遺物実測図②・遺構外出土遺物実測図①

第18図　遺構外出土遺物実測図②

第8節　まとめ

第3次発掘調査では弥生時代中期～後期の遺物包含層2か所と、中世の掘立柱建物跡4棟、溝跡2条、井戸跡1基、土坑4基、ピット101基が確認された。

弥生時代の遺構は、中期～後期の遺物包含層2か所のみで、その他の遺構は確認されなかった。北側約10mに位置する第1次調査区では、弥生時代中期後半の溝跡1条、弥生時代～古墳時代の竪穴状遺構1基、土坑1基が確認されている（第2図）。また、北側約150mに位置する大八木富士廻り遺跡でも弥生時代中期の遺構が確認されており、第1次調査で指摘されているように本遺跡の北側に該期の集落が存在するものと思われる。第1次調査で南東側に該期の集落の広がりの可能性を示唆されているが、第3次発掘調査では弥生時代の遺構は確認できなかった。2つの遺物包含層は南側に行くにつれて遺物密度が薄くなっていったことから、遺物包含層（微地形）の南端部に近い位置であると考えられる。出土した遺物は破片が多いものの、比較的大きく復元できたものも見られることから、第3次調査区の南側・東側に集落域があるものと推測される。

中世の遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝跡2条、井戸跡1基、土坑4基、ピット101基である。調査区北壁際で東西方向に走る上端幅1.7m以上の溝跡（ＳＤ０１）が確認された。溝跡を境に北側の第1次調査区と南側の第3次調査区とでは遺構分布の様相が大きく異なることから、溝の南側が上飯塚城に付随する屋敷地内となる区画溝であったと考えられる。ＳＤ０１の南壁際は遺構密度が極端に少ないことから、土塁が存在していた可能性がある。4棟の掘立柱建物跡は全て東西主軸方向がＳＤ０１とほぼ同じであることから、区画溝と方向を揃えて建てられた屋敷の建物跡であったと考えられる。また、3棟が東西に並んで分布しているが中央が2棟重複することから、少なくとも2時期以上の時期差があるものと考えられる。屋敷跡の範囲は、西端部は上飯塚城跡の外堀まで、北端部は第3次調査のＳＤ０１までと考えられる。東端部・南端部は未確認のため不明であるが、付近に存在する屋敷跡と同規模の1辺100m前後の四角形となるのではないかと推測する。屋敷跡の帰属年代は遺構に伴う遺物がないことから不明であるが、上飯塚城跡と同時期に存続していたと考えるならば16世紀代になるものと思われる。

掘立柱建物跡は発掘調査時で2棟、その後の整理等調査時に2棟を確認した。礎石が確認されたピットが2基（P37・80）あるが、いずれも建物を構成するピットとならなかったことから、別のピットの組み合わせで建物跡となる可能性は否定できない。建物跡数が増えること、建物を構成するピットが変わることも考えられる。また、柵列や塀などの単列の遺構もあると思われる。ピットからなる遺構は今回確認できた掘立柱建物跡が全てではないため、再検討の余地があるものと考える。

今回第1次調査区の南側を発掘調査したことで、弥生時代中期～後期の遺物包含層の広がりと、新たに中世の屋敷跡と考えられる遺構群が確認されたことは大きな成果であったと考える。その一方で弥生時代中期から後期の集落跡は今回の調査でも確認されなかった。周辺地域での発掘調査事例が増えることで、弥生時代の集落や中世の屋敷跡の広がり・規模などが解明されることを期待したい。

参考文献
群馬県教育委員会　1988『群馬県の中世城郭跡』
高崎市教育委員会　2011　高崎市文化財調査報告書第284集『飯塚・貝沢遺跡遺跡』
高崎市市史編さん委員会　2003『新編　高崎市史　通史編1　原始古代1』
高崎市市史編さん委員会　2000『新編　高崎市史　資料編2　原始古代II』

遺物観察表

出土土器観察表

( ): 推定 [ ]: 遺存

図版	遺物番号	出土位置	種別・器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	器形、文様、整形、文様等の特徴	遺存状況
6 図	1	SB04-p11 (旧 P102)	弥生土器 高杯	—	—	[1.8]	密	良好	赤褐色	外内面：平滑不明ヘラミガキ。赤彩を施す。	口縁部片
6 図	2	SB04-p1 (旧 P90)	弥生土器 壺	—	—	[4.9]	密	良好	にぶい褐色	外面：頸部ヨコナデ。体上部斜位ハケメ後擬似山形文を施文。内面：頸部～体上部横位ヘラナデ。	頸部～体上部片
8 図	1	SD01	弥生土器 壺	—	—	[2.6]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：口縁部横位工具による刻目。口縁部横位ハケメ。内面：口縁部ヨコナデ。	口縁部片
8 図	2	SD01	弥生土器 壺	—	—	[4.3]	密	良好	明黄褐色	外面：ヘラ描沈線文・波状文を施文。内面：頸部横位ヘラナデ。	体部片
8 図	3	SD01	弥生土器 鉢	—	—	[5.1]	密	良好	オリーブ黒色	外面：頸部山形文を施文。内面：ヘラナデ。	体部片
8 図	4	SD01	弥生土器 壺	—	[6.1]	[3.1]	密	良	灰黄褐色	外面：体下部斜位・縦位ヘラミガキ。底部ヘラナデ。内面：体下部～底部横位ヘラナデ。	底部 1/6
9 図	5	SD01	弥生土器 高杯	—	—	[3.1]	密	良好	赤色	外内面：杯上部ヨコナデ。杯中部ヨコナデ後斜位ヘラミガキ。赤彩を施す。	坏部片
9 図	6	SD01	弥生土器 高杯	—	—	[2.5]	密	良	赤色	外面：杯下部ヨコナデ。脚上部ヨコナデ後縦位ヘラミガキ。内面：杯～脚部ヨコナデ。脚上部斜位ヘラナデ。外面・内面坏部に赤彩を施す。	接合部完存
9 図	7	SD01	弥生土器 台付鉢	—	[7.0]	[2.5]	やや粗	良	灰黄色	外面：台下部斜位ハケ目。台端部ヘラケズり。内面：台部横位ヘラナデ。	台部片
9 図	8	SD01	須恵器 甕	—	—	[2.9]	密	還元焼成	灰白色	外内面：ロクロナデ。	頸部 1/3
9 図	9	SD01	須恵器 甕	—	—	[3.9]	密	還元焼成	青灰色	外面：平行タタキメ後頸部ユビナデ。内面：同心円当て具痕後ナデ。	体部片
9 図	10	SD01	硬質陶器 長頸瓶	(10.8)	—	[1.1]	密	良好	オリーブ黄色	外内面：ロクロナデ後焼成後輪。	口縁部片
9 図	12	SD02	弥生土器 壺	—	—	[1.9]	密	良好	灰褐色	外面：口縁部面取り。口縁部ヨコナデ後ヘラ描波状文を施文。内面：ナデ。	口縁部片
9 図	13	SD02	弥生土器 壺	—	—	[4.2]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：LR 単節縄文施文後ヘラ描波状文を施文。内面：ナデ。	体部片
9 図	14	SD02	弥生土器 鉢	—	—	[3.0]	密	良好	褐灰色	外面：櫛描波状文を施文。内面：横位ヘラナデ・ナデ。	体部片
9 図	15	SD02	弥生土器 壺	—	—	[2.5]	密	良好	灰黄褐色	外面：縦位ハケ後擬似山形文を施文。内面：ナデ。	体部片
11 図	1	SK01	須恵器 甕	—	—	[7.7]	密	還元焼成	黄灰色	外面：平行タタキメ。内面：同心円当て具痕。	体部片
11 図	2	SK03	弥生土器 甕	—	—	[3.4]	密	良好	にぶい黄色	外面：縦、単節縄文施文後ヘラ描波状文を施文。内面：ナデ。	体部片
11 図	3	SK04	弥生土器 鉢	—	—	[3.6]	密	良好	にぶい褐色	外面：櫛描波状文・山形文を施文。内面：ナデ。	体部片
11 図	4	SK04	弥生土器 甕	—	(10.4)	[1.8]	密	良	にぶい黄褐色	外面：体下部ヘラナデかつ、底部ヘラナデ。内面：体下部～底部横位ヘラナデ。	底部 1/6
14 図	1	P71・72	土師質土器 かわらけ	(10.8)	(5.0)	4.0	密	良好	明赤褐色	外面：口縁部～体上部ロクロナデ。体中部横位カキメ。体下部横位ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面：口縁部～底部ロクロナデ。	口縁部 1/10 体部～底部 1/3
14 図	2	P79	土師質土器 かわらけ	—	(8.0)	[2.4]	密	良	にぶい黄橙色	外面：体下部ロクロナデ。底部ヘラナデ。内面：口縁部～底部ロクロナデ。	体下部～底部 1/4
14 図	3	P 7	弥生土器 壺	—	—	[3.4]	粗	良	褐色	外面：LR 単節縄文施文後ヘラ描櫛歯文を施す。内面：頸部横位ヘラ描沈線文。	体部片
14 図	4	P13	弥生土器 壺	—	—	[4.4]	密	良好	にぶい黄色	外面：口縁部棒状工具による刻目。口縁部ヨコナデ後ヘラ描波状文を施文。頸部斜位・縦位ハケメ。内面：横位ヘラナデ。	口縁部～頸部片
14 図	5	P44	弥生土器 壺	—	—	[2.8]	密	良好	橙色	外面：口縁部棒状工具による刻目。口縁部ヨコナデ後ヘラ描波状文を施文。内面：ナデ。	口縁部片
14 図	6	P50	弥生土器 甕	—	—	[3.5]	密	良	にぶい黄橙色	外面：上位は櫛状施文、下位は LR 単節縄文施文後ヘラ描山形文で区画する。内面：頸部横位ヘラナデ。	体部片
14 図	7	P70	弥生土器 壺	—	(7.4)	[3.0]	密	良好	浅黄橙色	外面：体下部斜位ヘラナデ後縦位ヘラミガキ。底部ヘラナデ。内面：体下部横位ヘラミガキ。底部ヘラナデ。	底部片
14 図	8	P91	弥生土器 壺	—	—	[2.5]	密	良好	黄褐色	外面：ヘラ描櫛歯文を施文。山形文か。内面：頸部直しと同形不明。	体部片
14 図	9	P106	弥生土器 高杯	—	—	[2.0]	密	良好	赤色	外面：ヨコナデ後斜位ヘラミガキ。内面：ナデ。外内面に赤彩を施す。	坏部片
16 図	1	東側 遺物包含層	弥生土器 壺	(15.4)	—	[5.1]	密	良	浅黄橙色	外面：口縁部面取り。棒状工具による刻目。口縁部横位・斜位ヘラナデ。頸部～ 少組山形文。内面：全体的に調整不明瞭。横位ヘラナデか。	口縁部 2/3
16 図	2	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[3.0]	密	良好	橙色	外面：口縁部面取り後海苔三角形状の貼土（伊勢浮文）を2つ以上貼付。口縁部ヨコナデ。内面：横位ヘラナデ。	口縁部片
16 図	3	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[1.8]	密	良好	灰色	外面：口縁部ヨコナデ。内面：口縁部面取り。ヨコナデ後口縁部～口縁部に沿、単節縄文施文し、ヘラ描櫛歯文を施文。	口縁部片
17 図	4	東側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[14.8]	密	良好	褐橙色	外面：頸上部ヨコナデ。頸下部～体上部 LR 単節縄文施文後ヘラ描櫛歯文・ヘラ描沈線文を施文。内面：頸上部横位ヘラナデ。頸下部～体上部横位ヘラナデ。	頸部～体上部 1/4
17 図	5	東側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[13.3]	密	良	にぶい黄橙色	外面：体中部～体下部縦位ヘラミガキ。調整不明不明瞭。内面：体中部斜位・横位ハケメ。体下部ナデ。	体部片
17 図	6	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[8.9]	密	良好	黄褐色	外面：横位・斜位ハケメ後上位ヘラ描二重鋸歯文を施文。 内面：上位は横位ヘラナデ。下位は横位ハケメ。	体部片
17 図	7	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[3.7]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：LR 単節縄文施文後ヘラ描櫛歯文とヘラ描波状文を交互に施文。 内面：横位調整しく調整不明。	体部片
17 図	8	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[6.1]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：縦位ヘラナデ。内面：ヨコナデ。	頸部～体上部片
17 図	9	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[6.2]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：縦位ハケメ後上位にヘラ描櫛歯文、下位にヘラ描鋸歯文を施文し下向き部分に斜位ヘラ描櫛歯文を充填する。内面：ナデ。	体部片
17 図	10	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[5.3]	密	良好	にぶい橙色	外面：ヨコナデ後ヘラ描波状文2条とヘラ描櫛歯文1条を交互に施文。 内面：ナデ。	体部片
17 図	11	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[3.6]	密	良	にぶい橙色	外面：ヘラ描波状文とヘラ描櫛歯文を交互に施文。内面：横位調整しく調整不明。	体部片

種類	番号	出土位置	種別・器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
17 国	12	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[4.9]	密	良好	にぶい橙色	外面：縦位ヘラナデ後横位・斜位ハケメ、櫛描山形文か。内面：ナデ。	体部
17 国	13	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	8.0	[4.2]	密	良	橙色	外面：体下部縦位・横位ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面：体下部横位ヘラナデ。内面：ミガキに近い横位ヘラナデ。底部ミガキに近い斜位ヘラナデ。	底部完存
17 国	14	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[3.5]	密	良好	橙黄色	外面：体下部縦位・斜位ハケメ。底部ヘラナデ。内面：表面が剥離しており調整不明。	体下部～底部片
17 国	15	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	8.2	[2.4]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：体下部縦位ハケメ後横位ヘラミガキ。底部ヘラナデ。内面：体下部～底部ヘラナデ。	底部完存
17 国	16	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	8.4	[2.8]	密	良好	浅黄橙色	外面：体下部縦位ハケメ。底部ナデ。内面：縦位・斜位ヘラナデ。外内面に黒斑が見られる。	底部 1/2
17 国	17	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	[3.4]	[2.7]	密	良好	黄橙色	外面：体下部縦位・横位ヘラミガキ。底部は剥落部分。内面：体下部～底部縦位・斜位ヘラナデ。外面体下部に赤彩を施す。	底部 1/5
17 国	18	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	5.6	[1.4]	密	良	灰白色	外面：体下部縦位・横位ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面：体下部～底部縦位ヘラナデ。外面体部に赤彩を施すが、表面が崩れる。	底部 1/2
17 国	19	東側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[4.6]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：口縁部ハケ状工具による刺突。口縁部ヨコナデ後櫛描波状文、頸部櫛描縦状文、体上部櫛描山形文を施文。内面：口縁部～体上部ヨコナデ。	口縁部～体上部片
17 国	20	東側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[4.7]	密	良好	黒褐色	外面：口唇部面取り。単節縄文施文後、口縁部ヨコナデ。体上部横位ハケメ後ヘラ描「コ」字重ね文を施文し、中心に刺突を施す円形浮文を貼付。内面：口縁部ヨコナデ。体上部横位ヘラナデ。	口縁部～体上部片
17 国	21	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[3.3]	密	良好	にぶい橙色	外面：口唇部単節縄文施文。口縁部ヨコナデ。頸部以下剥落部分。内面：ヨコナデ。	口縁部～頸部片
17 国	22	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[3.7]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：口縁部ヨコナデ。頸部櫛描波状文を施文。内面：口縁部～頸部ヨコナデ。	口縁部～頸部片
17 国	23	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[2.4]	密	良好	灰色	外面：口唇部櫛描文施文。口縁部ヨコナデ後櫛描波状文を施文。内面：ヨコナデ。	口縁部片
17 国	24	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[2.8]	密	良好	オリーブ色	外面：口唇部ハケ状工具による刻目。口縁部ヨコナデ後櫛描波状文を施文。内面：口縁部ヨコナデ。	口縁部片
17 国	25	東側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[15.7]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：ミガキに近いヘラナデ後上底にヘラ描山形文を施文。内面：ヘラナデ・ナデ。外面に煤付着。	体部片
17 国	26	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[3.4]	密	良好	灰褐色	外面：ヘラ描「コ」字重ね文を施文。内面：ナデ・ヘラナデ。	体部片
17 国	27	西側 遺物包含層	弥生土器 壺	—	—	[4.1]	密	良好	にぶい橙色	外面：ヨコナデ後ヘラ描波状文・山形文を施文。内面：ヨコナデ。	体部片
17 国	28	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[4.3]	密	良好	灰褐色	外面：ヨコナデ後上位に櫛描波状文・縦状文、下位に櫛描山形文を施文。内面：ヨコナデ。	体部片
17 国	29	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[3.8]	密	良好	暗灰黄色	外面：ヨコナデ後櫛描縦状文・縦状文を施文。内面：横位・斜位ヘラナデ。	体部片
17 国	30	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[4.1]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：ヨコナデ後櫛描縦状文を施文。内面：ヨコナデ。	体部片
17 国	31	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[3.0]	密	良好	にぶい褐色	外面：縦位ハケメ後斜位ヘラ描四角文を施文。内面：ミガキに近い横位ヘラナデ。	体部片
17 国	32	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	—	[4.1]	密	良好	にぶい褐色	外面：縦位ハケメ後斜位ハケメ。内面：ミガキに近い横位ヘラナデ。	体部片
17 国	33	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	6.6	[14.8]	やや粗	良	灰黄褐色	外面：体中部縦位・斜位ハケメ後体中部ヘラ描四角文・櫛描波状文、体下部3個1単位の竹管文か・縦位ヘラミガキ。底部ヘラナデ。内面：体中部斜位ハケメ、体下部横位ハケメ、最下部はやや不明瞭。底部ナデ。	体下部～底部 9/10
17 国	34	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	5.0	[2.6]	やや粗	良	灰黄褐色	外面：口縁部直下に円形貼土部付後口縁部ヘラナデ。口縁部ヘラ描四角文。口縁部横位ハケメ後縦位ヘラナデ。内面：横位ヘラナデ。外面に赤彩の痕跡が見られる。	底部完存
17 国	35	西側 遺物包含層	弥生土器 甕	—	5.6	[1.6]	密	良好	黄褐色	外面：体下部縦位・横位ヘラナデ。底部ナデ。内面：体下部縦位ハケメ。底部ヘラナデ。	底部完存
17 国	36	西側 遺物包含層	弥生土器 台付甕	—	[7.6]	[6.2]	やや粗	良	にぶい黄橙色	外面：台部斜位・縦位ヘラナデ。台部脚ヘラケズリ。内面：体下部ナデ。台部斜位ヘラナデ。	台部 1/4
17 国	37	西側 遺物包含層	弥生土器 台付甕	—	[7.4]	[3.4]	密	良好	浅黄橙色	外面：台部斜位・縦位ヘラナデ。台部脚ヘラケズリ。内面：台部縦位ヘラナデ・ナデ。	台部 1/5
17 国	38	西側 遺物包含層	弥生土器 高坏	—	—	[3.4]	密	良	浅黄橙色	外面：口縁部直下円形貼土部付後口縁部ヘラナデ。口縁部ヘラ描四角文。口縁部横位ハケメ後縦位ヘラナデ。内面：横位ヘラナデ。外面に赤彩の痕跡が見られる。	口縁部片
17 国	39	西側 遺物包含層	弥生土器 高坏	—	—	[2.4]	密	良好	赤橙色	外面：斜位ヘラミガキ後内面縦状の粘土を貼付。内面：横位ヘラミガキ。外内面に赤彩を施す。	口縁部片
17 国	40	東側 遺物包含層	弥生土器 高坏	—	—	[3.0]	密	良	浅黄橙色	外面：口唇部平ヨコナデ。口縁部ナデ後LR単節縄文施文。内面：縦位・斜位ヘラミガキ。外面は赤彩か。内面は赤彩を施す。	口縁部片
17 国	41	東側 遺物包含層	弥生土器 高坏	—	—	[3.8]	密	良好	浅黄橙色	外面：ヨコナデ・縦位ヘラナデ。内面：横位ヘラミガキ。外面は赤彩か。内面は赤彩を施す。	坏部片
17 国	42	西側 遺物包含層	弥生土器 高坏	—	—	[3.4]	密	良好	赤色	脚部が太く外反する。外面：斜位縦位ヘラナデ。脚下部縦位ヘラナデ・ハケメ。内面：表面剥落し調整不明。外内面に赤彩を施す。	脚部 1/4
17 国	44	遺構外	弥生土器 甕	—	—	[1.8]	密	良	赤橙色	外面：口唇部面取り状にナデ。口縁部ヨコナデ。頸部横位ハケメ。内面：平位不明ヘラミガキ。外内面に赤彩を施す。	口縁部片
17 国	45	遺構外	弥生土器 壺	—	—	[1.7]	密	良好	にぶい黄色	外面：ヨコナデ。内面：ヨコナデ後ハケ状工具による刺突を施す。	口縁部片
17 国	46	遺構外	弥生土器 壺	—	—	[3.3]	やや粗	良好	にぶい黄橙色	外面：口唇部単節縄文施文。口縁部縦位ハケメ後ヨコナデ。頸部横位ハケメ後ヨコナデ。内面：口縁部ヨコナデ。	口縁部片
17 国	47	遺構外	弥生土器 壺	—	[4.0]	[1.4]	密	良好	明赤褐色	外面：体下部縦位ヘラケズリ・ヘラナデ。底部ナデ。内面：体下部縦位ヘラミガキ。底部ナデ。外内面に赤彩を施す。	底部 1/4

掲載	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
17図	48	遺構外	弥生土器 壺	—	3.9	[1.7]	密	良好	橙色	外面：体下部横位ヘラナデ。底部ナデ。内面：体下部縦位ヘラナデ。底部ナデ。	体下部1/4 底部完存
17図	49	遺構外	弥生土器 壺	—	(4.6)	[1.6]	密	良好	灰黄褐色	外面：体下部横位ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面：体下部～底部ナデ。	底部1/3
17図	50	遺構外	弥生土器 甕	—	—	[3.9]	密	良好	にぶい褐色	外面：口縁部LR単節縄文施文。口縁部ヨコナデ後上位にLR単節縄文施文し、下位にヘラ描状沈文を施文。頸部ヨコナデ。内面：口縁部～頸部ヨコナデ。	口縁部～頸部片
17図	51	遺構外	弥生土器 甕	—	—	[3.7]	密	良好	にぶい黄橙色	外面：口唇部単節縄文施文。口縁部ヨコナデ後LR単節縄文施文。頸部横位ヘラナデ。内面：口縁部横位ヘラナデ・ヨコナデ。	口縁部片
17図	52	遺構外	弥生土器 甕	—	—	[2.7]	密	良好	にぶい褐色	外面：口唇部単節縄文施文。口縁部ヨコナデ後ヘラ描状沈文施文。頸部横位縄文施文。	口縁部片
17図	53	遺構外	弥生土器 甕	—	—	[3.2]	密	良	褐灰色	外面：口唇部LR単節縄文施文。口縁部～頸部ヨコナデ。内面：口縁部～頸部ヨコナデ。	口縁部～頸部片
17図	54	遺構外	弥生土器 甕	—	—	[7.2]	密	良好	にぶい褐色	外面：ヨコナデ後櫛描波状文を施文。内面：横位ヘラナデ。	体部片
17図	55	遺構外	弥生土器 甕	—	(5.4)	[3.2]	やや粗	良好	明褐色	外面：体下部縦位・横位ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面：体下部横位ヘラナデ。底部ナデ。	底部1/4
17図	56	遺構外	弥生土器 甕	—	(5.5)	[3.0]	やや粗	良好	黒色	外面：体下部斜位ハケメ・横位ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面：体下部横位・縦位ヘラナデ。底部ナデ。	底部1/5
17図	57	遺構外	弥生土器 台付鉢	—	—	[4.1]	密	良	にぶい黄橙色	外面：体下部縦位ヘラナデ。台上部斜位ハケメ。内面：体下部縦位ハケメ。台上部横位ヘラナデ。	接合部完存
17図	58	遺構外	弥生土器 鉢形	—	(9.2)	[2.0]	密	良好	灰黄色	外面：鍔下部縦位ハケメ後縦位ヘラミガキ。脚端部ナデ。内面：鍔下部縦位ハケメ後ナデ。	脚部1/5
17図	59	遺構外	弥生土器 高坏	—	—	[1.6]	密	良	淡黄橙色	外面：LR単節縄文施文後ヘラ描波状文を施す。内面：ヨコナデ。外内面に赤彩を施す。	口縁部片
17図	60	遺構外	弥生土器 高坏	—	—	[4.5]	密	良好	淡黄橙色	外面：坏上部横位ヘラケズり。坏中部横位ヘラナデ・ヘラミガキ。内面：横位ヘラミガキ。内面に赤彩を施し、外面は赤彩の痕跡が見られる。	坏部片
17図	61	遺構外	弥生土器 高坏	—	—	[3.6]	密	良	灰白色	外面：坏上部ヨコナデ。坏中部横位ヘラケズり・ヘラミガキ。内面：坏上部～坏中部横位ヘラミガキ。内面に赤彩を施す。	坏部片
18図	62	遺構外	須恵器 遺存不明	—	—	[4.7]	密	良好	明黄灰色	外内面：ロクロナデ後横撫器痕。	口縁部片
18図	63	遺構外	石製品 小型品	—	—	[4.4]	密	良好	明緑灰色	外面：軸間厚く調整不明。内面：コクロナデ。軸垂れあり。	体部片
18図	64	遺構外	染付 碗	—	(7.8)	[1.3]	密	良好	明緑灰色	外面：高台部界線2条。底部外縁部界線1条。内面：体下部不明文様。見込み外縁界線2条。	底部1/5
18図	65	遺構外	染付 碗	—	(4.2)	[3.7]	密	良好	明緑灰色	外面：体部細目文。高台部無文。高台端部面取、刷毛取りか。内面：無文。	体下部～高台部1/4

出土石製品観察表

掲図	番号	出土位置	種別	法量 ()：推定 []：遺存 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	器形、成・整形等の特徴	遺存状況
9図	11	SD01	石製品 剥片	[2.8]	1.8	0.5	2.6g	滑石		破片
17図	43	遺構覆土直上	石製品 剥片	[6.1]	3.1	0.7	[11.8]	滑石		破片
18図	66	遺構外	石製品 剥片	[4.7]	4.9	1.2	[33.8]	滑石	側縁を平坦に加工している。	破片
18図	67	遺構外	石製品 剥片	[4.4]	3.6	0.9	[15.1]	滑石		破片

発掘調査報告書抄録

ふ り が な	いいづか・かいざわほりそいいせき3
書 名	飯塚・貝沢堀添遺跡3
副 書 名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	高崎市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第365集
編 著 者 名	髙林 真人
編 集 機 関	株式会社 測研
所 在 地	〒370－3517 群馬県高崎市引間町712-2
発 行 年 月 日	平成28年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 (世界測地系)	東 経 (世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
飯塚・貝沢 堀添遺跡3	群馬県高崎市 飯塚町貝沢堀添 294-1	102020	648	36° 20′ 46″	139° 0′ 14″	20150824 ～ 20160315	210㎡	集合住宅 建設

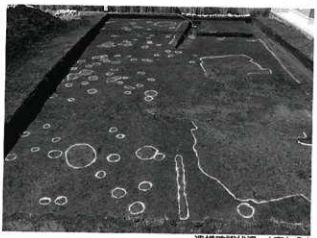
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
飯塚・貝沢堀添 遺跡3	散 布 地 屋 敷	弥生時代中～後期 古墳時代 平安時代 近世 中世	遺物包含層 掘立柱建物跡 4棟 溝跡 2条 井戸跡 1基 土坑 4基 ピット 101基	弥生土器 須恵器 灰釉陶器 陶磁器 陶磁器	中世上飯塚城跡に隣接する屋敷跡の建物跡や区画溝などのほか、弥生時代中～後期の遺物包含層が確認された。

要約

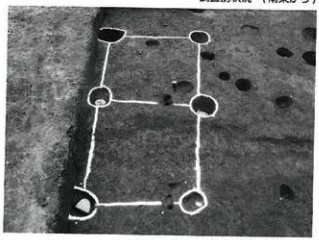
本遺跡は高崎台地上に立地する弥生時代および中世の遺構が確認された複合遺跡であり、今回は第3次発掘調査である。弥生時代の遺構は、北側の第1次調査区で竪穴状遺構、土坑、溝跡、遺物包含層が確認されたが、第3次調査では遺物包含層のみ確認された。出土遺物は大きく復元されるものも見られることから集落域が近くにあるものと想定され、該期の集落域は本遺跡の南側か東側に存在するものと考えられる。中世の遺構は、屋敷跡の北限を区画する溝跡と、区画内側の掘立柱建物跡4棟、井戸跡1基、土坑4基、ピット101基が確認された。掘立柱建物跡の主軸方向は区画溝とほぼ同じであることから、区画溝と同時期に建てられたものと考えられる。また、2棟の掘立柱建物跡が重複していることから、建物跡は少なくとも2時期以上の時期差があるものと考えられる。

調査区全景 （東から）

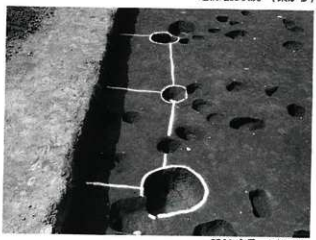
調査前状況 （南東から）



遺構確認状況 （東から）



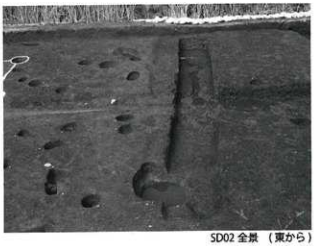
SB01 全景 （東から）



SB02 全景 （東から）

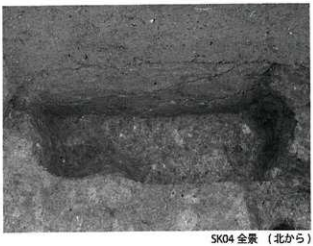
写真図版2

SD01 全景 （東から）

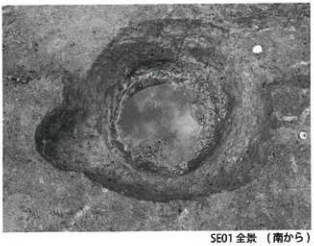


SD02 全景 （東から）

SK03 全景 （西から）



SK04 全景 （北から）



SE01 全景 （南から）

西側遺物包含層出土状況 （東から）

東側遺物包含層出土状況（第16図1・17図5・15）UP （南から）

西側遺物包含層出土状況（第17図33）UP（西から）

SB04

第6図1

SD01

第9図6

第9図8

第9図9

第9図11

P71・72

第14図1

P79

第14図2

遺物包含層

第16図1

第16図2

第17図7

第17図10

第17図5

第17図8

第17図9

第17図4

第17図6

第17図13

第17図19

第17図16

第17図20

第17図18

第17図17

第17図26

第17図25

第17図33

第17図34

第17図39

第17図41

第17図42

第17図43

遺構外

第17図48

第17図53

第17図61

第18図64

第18図66

第17図47

第17図54

第17図57

第18図63

第18図65

第18図67

高崎市文化財調査報告書第365集
飯塚・貝沢堀添遺跡3
—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2016年3月25日　印刷
2016年3月31日　発行
発　行　　赤木　洋子
　　高崎市教育委員会
　　株式会社　測研
印　刷　　上毎印刷工業株式会社